The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北方ヨーロッパの商業と経済　1550-1815年
Author(s)	玉木, 俊明
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57884
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【46】

氏　　名	玉木俊明（たまき　としあき）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３２５９　号
学位授与年月日	平成21年３月30日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**北方ヨーロッパの商業と経済　1550－1815年**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　秋田　　茂 （副査） 教　授　江川　　温　　教　授　佐村　明知 京都産業大学客員教授　川北　　稔

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、申請者が過去約20年にわたって行ってきた、近世の北方ヨーロッパ世界における国際商業の発展と世界システムの形成過程の研究を、実証的な貿易統計分析と新たな理論的枠組みを組み合わせて一冊の研究書としてまとめたものである。論文は、序章に続き、全８章、３つの補論、終章、および英文要約からなり、全422ページで構成される。

序章では、近世におけるヨーロッパ世界内部の「大いなる分岐」に着目することで、近代世界システムの誕生の過程が明確になること、その際、北方ヨーロッパ世界における国際商業の発展と商人の活動、国家と商人の関係に着目することが強調される。

第一章と補論Ｉでは、本論文全体をつらぬく理論的枠組みである「商業資本主義」概念の説明とその歴史的意義が論じられる。すなわち、D. ノースら新制度学派の学説にもとづき、「信頼できる商業情報を低コストで獲得する」取引費用の削減が経済発展の鍵となること、国際商業が経済の主導部門であった近世ヨーロッパの資本主義の形態が商業資本主義であること、そこでは、輸送を担う海運業が決定的に重要であり、近世のオランダ・アムステルダムは商品と情報交換の「ゲートウェイ」として機能した、と主張される。こうした商人層を中心とする国際商業の発展は、国家財政とも緊密に結びついていた点が確認される。

第二章から第四章と補論 II では、17 世紀中葉までのバルト海貿易の展開が、『エアーソン海峡通行税台帳前編』のデータをもとに分析される。穀物取引を通じたダンツィヒとアムステルダムとの緊密な関係の構築、原材料輸出国の商品輸送を支配したオランダ船の優位、オランダからストックホルムに移住した外国人商人の活躍とスウェーデンの「バルト海帝国」の形成過程が詳細に提示され、この時期を「穀物貿易の時代」と規定している。

第五章と第六章では、1661-1780 年のバルト海・白海貿易の展開過程が、『エアーソン海峡通行税台帳後編』のデータをもとに分析される。第五章では、木材・ピッチ・タールなどの造船資材や鉄の輸出に代表されるように、穀物に代わって原材料の取引がバルト海貿易の主流になったこと、新たにイングランドが台頭してきたものの依然としてオランダ船が輸送面で優位に立っていたことが明らかにされる。次いで第六章では、北方ヨーロッパの地域間貿易で新たに台頭したイングランドの通商状況が、税関史料(Custom3)を使って分析される。その結果、サンクト・ペテルブルクを通じたロシアからの鉄の輸入貿易が、イングランド経済の発展にとって決定的に重要であったことが明らかにされる。

第七章と第八章、および補論 III では、18 世紀後半の北方ヨーロッパ国際商業の変容の過程が論じられる。まず第七章では、中立都市ハンブルクが果たした海と陸（後背地）とを結ぶ「ゲートウェイ」としての役割が強調される。ハンブルクが、イギリスと並んで大西洋貿易を発展させたフランスの港湾諸都市、特にボルドーと緊密な貿易関係を構築し、環大西洋貿易とバルト海貿易、さらに中東欧内陸部とを結ぶ物流・商業ネットワークの要となったこと、また、同市が、戦時においても中立都市として活発な海外通商活動を展開し「もう一つの世界システム」の結節点として機能したことが強調される。次いで第八章では、北方ヨーロッパの経済発展にとってオランダが果たした歴史的役割を改めて総括的に論じている。著者によれば、オランダは商人が中心となった「最初の近代経済」として、北方ヨーロッパ世界におけるモノ・金融・情報の結節点となったが、その国家機構は分権的であり商業活動への介入も限定的であった。他方で、そのオランダが蓄積した国際商業のノウハウは、イングランド公債の購入や商人の移住を通じてロンドンに移植され、結果的にオランダからイギリスへのヘゲモニーの移行が促されたと主張する。

終章では、18 世紀の北方ヨーロッパ世界において、以上のようなアムステルダム、ロンドン、ハンブルクの三都市を基軸とする多角的貿易決済システムが成立し、三都市が経済的に融合していく過程で近代世界システムの中核地域が形成されたこと、さらに、積極的な国家の支援（保護貿易政策）を得て公式の植民地帝国を形成したイギリスとロンドン商人が優位に立ち、商人と物流を中心としたハンブルクのシステムを包摂することで、最終的に近代経済国家を中心とした近代世界システムが成立したと主張する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近世の北方ヨーロッパ世界の全体像を、商業資本主義の形成と展開の観点から、各国の貿易統計を駆使して実証的に解明した独創的な研究である。

第一に、理論的な考察の枠組みとして、D.ノースらが提唱する新制度学派の「取引コスト」の概念を使い、国際商業の歴史的役割を再考する新たな観点を提示した。従来の議論が、生産第一主義の観点から各国単位の再生産構造を重視してきたのに対して、本論文は最新の経済学理論を歴史分析に適用し、国際商業の効率化と海運業の発展が経済発展の原動力たりうるという主張を説得的に展開し、ヨーロッパ経済史を分析する枠組みを見直す

新たな視点を提起することに成功している。

第二に、本論文は世界システム論の観点から、近世の北方ヨーロッパ世界を一体としてとらえることで「近代世界システム」論をめぐる論争にも一石を投じた。従来、本書が対象としたイギリス・オランダ・バルト海諸地域・ロシアなど諸地域の個別研究はあったが、北方ヨーロッパ世界を総体としてとらえる必要性は十分に認識されていなかった。本論文は、国際商業活動の中心がアムステルダムからロンドンへ移動する過程とその要因、ハンブルクを中心とした独自の商業ネットワークの形成、およびその三者が結合した三極構造に支えられた北方ヨーロッパ経済の統合の過程を見事に描きだしている。さらに本論文は、オランダからイギリスへのヘゲモニーの移行を、「国家と商人」の関係、経済活動に対する国家の保護と干渉の視点から説得的に説明している。

第三に、本論文はエアーソン海峡文書を本格的に活用した日本で最初の実証研究である。かねてから同文書の重要性は認められていたが、関連する諸国の貿易統計とつき合せたうえで、国際商業の発展を通じた北方ヨーロッパ世界の一体化の過程を描き出した点は高く評価できる。現地の経済史研究者との緊密な学問的交流・対話、共同研究やワークショップ、英語論文執筆を通じての日本の学界からの情報発信についても特筆に価する。

本論文の独創性とメリットは以上の三点に要約できるが、問題が全くないわけではない。本論文のキイ概念の一つである「ゲートウェイ」がいまひとつ明確でない。後背地を持たない貿易はありえないし、近年注目されているネットワーク論とどのような相違があるのか明らかでない。また、ハンブルクの独自性に着目する一方で、そこで取引された商品が中東欧の内陸諸地域にどのような影響を及ぼしたのか、必ずしも明らかにされたわけではない。しかしそれによって、ヨーロッパ経済史・国際商業史研究で新たな問題を提起した本論文の価値が大きく損なわれるものではない。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。